

## 友だち関係とリーダーの指導

清水 エミ子

私たち教師は集団教育を第一にねらい、集団の成長とか、グループ活動の発展(社会性の成長)に力を入れて保育にはげんでいます。真剣になればなるほどあやまった指導や計画を立ててしまう傾向はないでしょうか。

いつまでも幼児の実態にそくしてと考え神経をつかいます。が、それほどこの実態を正しくとらえているでしょうか。つい楽な型の上での成功を追いかけ)方向に流れてしまいがちではないでしょうか。

集団活動でまず大きく問題になるのは、グループとそのリーダーでしょう。このグループやリーダーの指導はどうでしょう。つい教師の都合で作ったグループで、どんな活動でも、きょうに処理してくれる子ばかりを(リーダーに)動かしてしまいがちではないでしょうか。私は積木遊びの観察を通し友達関係やリーダーの問題で、「アア、ナールホド ああそうだったのか」

といろいろの場でいろいろの事を失敗や成功から教えられました。そしてその一つ一つが子どもたちの指導の上に、集団活動の発展のためにずい分と参考になったのです。

まず、私達の頭からはなれたことのない、良い友達関係とはどんな友達関係でしょう。いつでも、どこでも誰とでも交れるような友達関係です。幼児はどのような指導によって良い友達関係が持てるようになるでしょうか。私の観察したいくつかの友達関係は、この事にいろいろの問題をなげかけてくれました。

### 交友と興味

友達と交りが持てるようになる根本は他人に興味が生れて来ることのようにです

「不思議だなあーひろし君が三人いるけど皆ちがう顔なの、どうしてかなあー、あの、ひろし君も来てもらんよ」

と二期になって（内向性）一人の友達もできず一人で積木遊びをしていた博君が、足もとに積木をちらばした宏君（この子も内向性）で一人で積木をしていた）と向き合い、はなれた所で積木をしていた弘君（外向性で活潑な子）を呼んでいます。そして少しの間静かな交わりが持てました。この時だけでなく三人でえのぐの前で顔を描いたり、また粘土の時もいっしょに粘土に顔を押しつけて顔型を作ったりしてまわりのものをおどろかせました。これは積木遊びが媒介になっての交りなのでしょう。いいえこれは博君が「他人の顔に強い興味を持って来た」からなのです。

リーダーがいて顔に気付かせてくれたので先生に教えてもらったのではないのです。自分から興味が起って交りが持てたのです。このように個から他に興味を持つということが個を動かし、動くことによって経験を豊かにし、自信がつき確信が持てるようになり、安定した交りになり、リーダーシップが取れるようになるのではないのでしょうか。

## リーダーとリズム

（交友とリズム）

どんなに良いリーダーやグループでもその子のリズムに合わなくてはうまく活動が発展しない

船の課題で積木をしていた時（外向・内向と性格の異った混合のグループで）のことです。

いつものようにリーダーシップを取っていた春雄が

「おーい準ちゃん、君前の方作れな、僕ら後作る」

と口早に言って自分はどうん後の方を積みはじめていました。

（春雄は外向、準一は内向性）しばらく皆無言でしたが春雄がヒョイとくびを上げ、

「ねえ準ちゃん、前の方少し高くしな、旗作って立てようぜ、三角とこういうの持って来てさ」とスピードで言いながら自分で積木をはこんで来ていました。準一は

「うんいいんだよ　ここはこれで」

とのんびり積木を立てたりねかせたりしていました。この時の二人の間のタイミングは非常にちがっていました。すると春雄はまぢきれなくなつて一しょに船の後を作っていた満夫に、準ちゃんにいった通り同じことをいいました。満夫（外向性）は「よしきた」とゆうような顔をして準一の所に行き積みなおそうとしましたが準一は「いい」と言つて動きません。満夫は春雄の顔をみました。と同時に「準ちゃんなんかつまらないや、みんなの言つ通りにしないん

だもの」

と二人で攻撃しました。

「いいよぼくが前の係だからぼくがやるよ」とすなおに（のんびりと）攻撃に対して反応しました。

ひょうしぬけした春雄と満夫は

「そんならぼくら（ぼくたち）ちがう所で作ろう」

と三、四人つれて少し離れた所で作り始めました。（同じ性格の同じリズムの子ばかり連れていった）残った準一も準一と同じようなリズムの子四、五人とで静かに楽しそうに続きを作っていました。春雄の方はスピーディーで活潑に積み重ねられていきます。なぜこのときいつもおだやかにリーダーシップの取れる春雄は準一とうまく交れなかったのでしょうか。これはいくらリーダーが上手でも、二人のリズムが合わないのでスムーズに交れなかったのではないのでしょうか。リズムが合った友達とならテンホがおそくても、まさつのあったその場でも適当なリズムに合わせ自分で交りのチャンスをつかんでいくようです。このように、どんなに教師が一生懸命はたから働きかけても本人に強い興味を起らなくては友達関係は出発しませんし、いろいろの手だてで交りを持たせてもリズムに合った友達関係でなければ、良いリーダーがいてもまさつが起きたり遊びがこわれたりするという問題が起ることを知らされたのです。次に問題になるのはケンカでしょう。

### リーダーとけんか

友達関係が発達するには正しいけんかは  
必要なのです

積木は好きだけれど友達がなくひとりだけで積木をしている茂君（内向性）が、積木を振り上げて清君（内向的でいつも茂と並んでひとりて積木をしている）に向かって行きます。私は思いがけない光景にびっくりし瞬間とまどいました。そしてしばらくじっと見ていました。他の男の子達もびっくりして見ていました。

「バカー なんて下におろしたの、いつもの知ってるのにー」

と茂は清にどなりました。逃げていた清はキッと茂の方を向き、

「だって茂ちゃんなんか、いつもいつも同じことばかりじゃないか だから教えてやったのに」

と攻撃しました。すると茂も

「言わないのにやって」と真つ赤な顔で清の右手をじれてつかみました。つかまれた清は反射的に茂の胸をつきました。そして

「いつも同じじゃいっしょにしられない（できない）じゃないか」と言うのです。

ここで私は二人の気持が解ったので、  
「仲良しがけんかして どうしたの」

と声をかけてみました。すると清が口をとがらせて

「いつもどちがうふうにしてやったのに おこったの」

というのです。(今までの清は人前ではあまりしやべらない子なのです)私は二度びっくりしました。ここで指導をあやまってはと体がかたくなるのです。そして

「清君、茂君と遊ぼうと思つて積木いじったんですってさ、でも茂君は積木いじっちゃいやだったのね」

と言うと二人ともふかくうなずいていました。

「なあんだ、二人共仲よく遊ぼうと思つてけんかしたんじゃない」  
とだけ言つて室から出てしまいました。しばらくして部屋をのぞくと二人は何やらゴソゴソ積木を積んでいました。

次の日の朝は誰もいない保育室のイスに二人がこしかけて話してました。清の声は小さくて聞き取れませんが、茂は

「君きのう、ここんとこつかんだね。君の手、やつこい(やわらかい)ね、ぼくんちのにいちゃんの手よりやつこいぞ」  
と言っていました。

これこそけんかの取りもつえんではないでしょうか。この後二人の友達関係が広がったことはいうまでもありません。

自己の欲求を満足させようとけんめいに遊んでいた二人はそれぞれけんめいさがあまって、けんかになったのです。集団の中でも自己が主張できるようになつてのけんかなのです。このけんかはボス達のそれとちがひ正しいけんかなのです。友達関係を広げていくた

めには、静かな交りだけではだめで、けんかのような荒い交りも必ず必要なのです。

### ボスと友達関係

ボスの集団をこわし同じ傾向のグループで自信をつけ、よいグループで友達関係が持てるようになれば、力強い創意にみちたりリーダーシップが取れるようにまである

「お前の船機械入れる所ないのか、エンジンどこへ入れるんだよ、そこそうやっちゃだめじゃないか、ちがうの作れ」  
と自分の体を動かさず理くつで人に命令している信夫。

「バカー、なんだよ てめえ」

と思うままに行動し、思うようにならないと手当り次第人を打ったり取ったりこわしたりして争いを起す伸一と、二つの傾向のちがうボス達がいつしよになつて(二組)いるようです。そして

信「あんなのちがうよなあー伸ちゃん」

伸「バカちがうよ、かせ、ここはこうなつてる」

とせっかく作つている友達のを取つたり打つたりして泣かしてしまいます。これですまないで、信夫は伸一に

「こわしちやえ」といって、はでに積木をけとばしてこわしたりし

ます。

このように行動によるボスの伸一と理くつによるボスの信夫とが一しょになった時に、特にボスの力が大きく強くなるのです。そこで私は、この質のちがうボスを分けはなすことによってボス力を弱めようと、二つに分けて積木をさせ、ボス力を弱めていったのです。

(それぞれのボスは単独では非常に弱くボスになりきれないのです) この観察ではっきりわかったことは、ボス行為は劣等感が根本になつてのことです。そしてその劣等感をカバーするために、一しょに(組になつて)ボス行為をします。(くわしくは9月号・第13回保育学会論文抄録を参照下さい。)

そこで、同じ傾向の幼児達を近づけ、無理なく交れるようにしていくと、次第に安定し自信が持てるようになり、リーダーにまでなれるようになるのです。いいえ、リーダーになるだけでなく、ボスになるような子はそのリードの仕方が力強く、大きな活動にまで発展させていくことができます。私はこの観察で「ボスは学級を發展させる」と強く感じさせられたのです。

### グループとリーダー

教師より子どもの方が適かくにグループ作りとリーダーのえらび分けをする

砂場でだんご割りのコンクールをした時のことです。

抵抗の少ない活動だからと思ひ、四〇名を等質の(男女混合、外向性・内向性、リーダー格の子ら)五つのグループに分けました。勝ちぬぎ競争です。

一回戦は皆自分ひとり勝ちたく(ゲームのルールのみこめなかった?)グループなどそっちのけで、あつちでもこつちでもバラバラにはじめられてしまったのですが、二回戦が始まった時(私は一回戦の反省やグループについて何も示唆しませんでした)貴好のグループがかたまつて何やら相談しはじめました。番が来ても「ちょっとタイム」

と一生懸命頭をつけての相談です。

貴好(どんな活動でもリーダーになれるおだやかな子)が、「皆、でっかく(大きく)したのに、どうして豊の小さいのにまけたんだらう」と言う

「なあ、豊のかたいのなあー」

と誰かが言いました。

すると、聞きなれない利一(何をするにも人のうしろにくつついている弱虫の子)の聲が、

「年木ちゃんいつも砂場で山やだんご作っているでしょ、だから教えてもらえば」

と言うのです。言われた年木は、顔を赤くしていましたが、小さ

い声で、

「力入れてぎゅうとにぎるの、ちょっと水かけて、そいでかわいた砂かけてかためるの」

とてれくさそうに言いました。すると茂が

「年木ちゃん先生で皆をみてやるの」

貴好が「うんそれがいいや、ここさうこのね」と言いました。

その時他のグループの子が、

「はやくしろよ貴好ちゃんら(ちゃんたち)」

とおこりました、するとどうでしょう。引つ込み思案の年木が、

「よしやろうぜ」

と少し大またに出ていきました。グループの皆は年木君の手とだんごをじっと見まもっていました。

相手のだんごは、二両手でやっと持てるような大きなだんごでした。皆の目は二つのだんごを見くらべています。じゃんけんで年木君が負けました。

大きなだんごが、年木君の小さなだんごの上に落ちて割れました

た。年木君のだんごは割れた砂にうずもれて見えません。見ていた全員が両方割れたと思ひ「同点」と口々に言いました。

年木は無言でおもむろに手を割れただんごの砂山の中につっこみ自分の小さいつやのあるだんごを取り出してにっこりしています。

年木君が勝ったのです。年木のグループの子達は

「ワイイ」とかん声をあげてよろこびました。

年木は三人も勝ちぬきました。

年木のグループは年木の言う通りだんごを作り、小さいけれどかたいのが作れるようになり第一位になりました。

皆大はしゃぎ、もう一回もう一回と大した熱の入れようなので、

三回目の決勝戦をはじめようとした時です。

「先生組がえしてよ。ぼくたちちょっと無理だよ、あっちの組なんか砂遊びのうまい子ばかりでしょ、ぼくらは砂遊びのへたくそな子

ばかりだもの無理だよ」

と健ちゃんが申し出ました。するとそれを聞いていた広康が、

「だれたちだよ」というと健君がグループの子を集めました。

「ほんとか、かわいそうに、あいじゃ無理だよ」

「ぼくらのけい子ちゃんあげる。けい子ちゃん行ってやれよ」

と健君が言いました。

するとさっきの年木が

「みんな砂場にこしかけて良く分けければねえ」

ととなりの一夫に言いました。一夫は、しばらく考えていて、

「じゃ先にうまい人からね、一のくみはブランコのとこ、二はオスベリ台、三はたいこばし、四は鉄ぼう、五はこの砂場に行くのね」と、まず五人のリーダー格の子をえらびました。そして

「ひとりじゃむずかしいよ、弘美ちゃん(女)手つだってくれよ」

と二人でグループ分けをしました。他の子も、

「そこよりその人はこっちの方がいいよ」と意見をいっていました。

私はじっと見ていましたが、その手ぎわの良さに、びっくりしたり感心したりしたのです。

大熱戦で、三回も四回もやりなおしてやっと勝負がついたりして男も女も内向性の子も外向性の子も皆とけ合ってたのしい遊びが発展していったのです。

この活動の発展は何によるのでしょうか。良い友達関係がそれぞれグループで、いい学級全体でスムーズに行なわれたからでしょうか。

貴好のように、いくらリーダーになる力を持っていてもそのグループの友達関係に合っていないと十分力が発揮できないのです。また、年木に自信をつけてくれたように、おどろくほど子ども達は正しく友達の得手不得手を知っているのです。そして、グループ構成と友達関係がよければ、年木のように、うもれていた力を十分に発揮できるような力を持っているのです。

私達教師が理くつから生み出したグループ構成をしても、かえって活動をこわし活動の発展をきまたげてしまうことを強く知らされたのです。

無理なく子どもの集団を見まもり、方向づけていけば、子どもたちにかまかせておいた方が、一夫たちのようにその場・その場に適し

た(人数や性格)グループを子どもたち自身で作るということを合わせて知らされたのです。

以上はほんの一例ですが、子どもたちが毎日くり広げていく活動の一つ一つを見つめていると、前にものべたようにまず集団になり、強い興味を持ち、静かに(同じ性格のグループで)、そして荒く(異なる性格のグループで)交りながら、いろいろの経験を通して他人を正しく知り(得手不得手を)自分の力に自信を持ち、子どもも同志いつでも、どこでも、誰とでも、話し合い協力していけるようになるれば、子どもと子ども、教師と子どもとの関係が発展し、いろいろなグループでいろいろな活動ができるようになると思います。

こうなるのには、今までのべたようないくつかの問題(大きなそして小さな)がありますが、まず大切な心がまえは、一つの活動に対し、その都度、考察し、まちがいはなく見つめ、ためしては考えなおしていくことが忘れてはならない事のようにです。

自分の体で体当りしたためしていくような子のリーダーは、どんな失敗があっても多くの友達から好かれ愛されます。が、他人のフンドシですもうを取るような子は、どんなに手ぎわよくリーダーができて、多くの友達からきらわれてしまいます。

私達教師もかりものの理論で処理することなく、正しく子どもたちを見つめ、まちがいはなく体当りで、子どもと取り組まなくては、とつくづく反省させられるのです。

(東京・関屋幼稚園)